

連載

# 54 在宅医療奮闘記

平成7年より  
在宅を開始した

## 私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長

### 橋本 満義 (64歳・内科)

#### 救急病院は命の修羅場 常に平常心が求められる過酷な現場

平成18年ころ、某グループホームのヘルパーさんから悲鳴のような声で電話がありました。T.Yさん(大正13年生まれの女性)

が夕食後居室にいたところ意識朦朧となったとのことで、かかりつけ医である私に緊急往診を依頼してきたのです。

それはまず、誤嚥による窒息の可能性が高いので、その確認と処置を指示

しました。そして、私とその施設に到着するのには20分ほどかかるので、SpO<sub>2</sub>(経皮的動脈血酸素飽和度)が85%以下であるか確認し、病状の悪化傾向がみえたなら至急救急車を呼び、高度機能病院へ搬送するようお願いしました。

急ぎ施設へと向かいましたが、到着寸前というところで救急車とすれ違ったため、私も後を追って高度機能病院へと向かったのです。高度機能病院に到着した私は、治療担当医に患者さんの既往歴を報告しようとした。しかし、患者さんはすでに心停止・呼吸停止の状態にあり、2人の医師が心マッサージと呼吸管理の処置をし、看護師2人で血管確保の最中でした。

突然、1人の医師が「H先生!手伝ってください!!!」と叫びました。すると白いカーテンが開き、ほかの外来患者さんの治療中であつたH医師がぬっと顔を出しました。そのH医師は、私の顔を見るなり「あれ!? お父さん? どうしたの?」と堂々とした平常心で私にむかって言ったのです。私は思わず「私の患者さんですよ。お願いしますね」と言ってその場を立ち去りました。

2時間ほどして、私の携帯が鳴りました。娘からの報告です。「先ほどの患者さんは、20分後に一時、心停止から不整脈がみられましたが、呼吸は戻らず、1時間後に亡くなりました。ご家族は人工呼吸器などの延命治療を希望されませんでしたので……」

後日、この時の出来事を妻に報告すると「自分の娘を尊敬するあなたの親バカぶりには、呆れてものも言えないわ……」と言われました。さて現在、人の命の大切さは、当然のごとくデマンス、クオリティ・オブ・ライフ、ノーマライゼーションに表現されています。ですので、特に救急担当の医師の治療行為は語り尽くせなく、より高い評価がされるべきでしょう。

そもそも、医療業界は医学研究・医療行為ともとも人の命に関わる仕事です。その中でも、人の生死に関わる救急医療は優先順位第一級としなければいけません。そうでなければ、どんな新薬の開発も、IPS細胞の研究成果も、「絵に描いた餅」と残念ながら言われてしまうでしょう。さらに、あえて言うならば救急医療や無医村医療は、高く評価され、正当な報酬に裏打ちされたものであるべきです。なぜなら、それらの業務には、実践的で高度な医療知識・能力・責任と強靱な意志と体力が求められるからです。

私は、人のやりたがらない仕事に就いている同志を、いつも尊敬しています。

### 「お医者さんが来てくれる」

24時間・365日態勢で対応(松山市全域)

私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。



医師数 19名  
(常勤6名、非常勤13名)

内科・外科専門医 16名  
(国立がんセンター勤務歴有3名)

精神科専門医 2名  
麻酔科専門医 1名  
(ペインクリニック科)

末期がん治療(緩和ケア)  
相談室開設!

Hyper Blood Viscosity(高血液粘度群)を科学する  
臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

## (医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>